

木工の町大川が

力強く生きてほしい

第27期大川商工会義所会頭
(株)近藤材木店 代表取締役社長

近藤 敏郎さん

今回の夢追い人は、近藤敏郎氏。第二十五、二十六期会頭。そして十一月一日からは第二十七期会頭を務めておられる。また近藤氏は、(株)近藤材木店の社長。そのほか、家具製造の(株)近藤産業、ホテル賃貸業の(有)近藤建物、不動産管理会社の(株)近藤興産の三社も経営する。

中核となる、(株)近藤材木店は、大川の老舗企業だ。なん

と創業は江戸時代の慶応元年。一五〇年続く企業だ。「会社の寿命三十年」とよく言われる。優良企業でも、多くが二十五年から三十年ぐらいで過ぎ去っていくからだ。そんな中、近藤材木店は驚嘆する、伝統ある会社。ちなみに近藤氏は五代目。

では、まずは近藤氏のプロフィール。近藤氏は慶應義塾大学卒業後、東京の貿易会社に就職。二年半サラリーマンとなる。

その後昭和四十年八月に近藤材木店に入社。

「サラリーマン時代の経験がその後仕事に生きた」という。「貿易会社で学んだL/C(Letter of credit)を駆使して、輸入業務を活発化させることができたと 생각합니다。」とのこと。ちなみにL/Cとは、貿易決済を円滑化するための手段として、銀行が発行する支払い確約書のこと。L/Cによって輸出者は





▲本社とセントラルホテル

船積みと同時に輸出代金を回収することができるとは、輸入者にとつても、輸入代金を前払いする必要がなくなるのだ。「当時の日本は高度成長期。円高傾向もあって、海外との取引は大成功でした。もつとも今ではL/Cのことを知らない人はいないとは思いますが」と言われる。

その後父の下で、会社経営に関与する。家具の生産性を高めるため、家具パーツ製造の(株)近藤産業を立ち上げた。そして昭和六十年に代表取締役。その後(有)近藤建物、(株)近藤興産を興す。

さて、近藤氏の座右の銘は何だろうか。シンブルな言葉。「和」である。産地の企業同士は切磋琢磨する必要があるが、その中で互いに相手を尊重し、助け合う関係を大事にするのだ。だから産地全体の繁栄を重視する。二代目大川商工会議所会頭で父の近藤頼三氏が地域ボランティアに熱心であった影響もあるようだ。

昭和四十二年、大川で四十から五十件の企業が同時期に倒産する、危機的な状況があった。大きな問屋が倒産し、家具業界が大不況になったのだ。そのときは「家具、建具が中心となる

大川の火を消してはならない」という切羽詰まった思いで奔走したという。「可能な限り安く、速く材を供給することに必死でしたね。」といわれる。

昭和四十八年頃のオイルショックの時期も、産地への木材供給が難しくなったことがあった。トイレットペーパーが店頭から消えた時期だ。国内の合板会社への陳情廻りを行い、協力を切実に求めた。そして、一部輸入品を使って何とか乗り切ったという。どのように材を分配したのだろうか。さまざまな思惑がある中、公平さを大事にした。それでこう言われる。「希望する量は届きませんでした。たとえば、トラック二台分の資材が届けば、それをどうやってお得意様に迷惑をかけずにお買い上げいただくか、頭を痛めましたね。」

近藤氏が家具産地を大事するのは、産地と共生しているとの強い思いがあるからだ。「株式会社大川」がなければ私たちは仕事ができないのです。互いをサポートするさまざまな業種が集まって私たちが存在しています。木材、金具、塗装、製材、突板など…それらが結集して大きな力となっています。」

実は、(有)近藤建物を興し、ビジネスホテル(セントラルホテル)を建造したのは、大川市の花宗川周辺の美化、そして大川の展示会にやってくる顧客たちの利便性を意識してのことだ。

また業界の景気が低迷している時期に、一億五千万円の私募債を募ることがあった。融資を得る目的があるのはもちろんだが、別の側面もあった。大川のイメージアップという効果だった。元会頭の松田氏と話し合い、「大川のイメージアップのためになにかできないだろうか」という話し合いの中で、あえて、それに踏み切ったのだ。

さて近藤氏は、大川の家具業界の潜在的なパフォーマンスと技術力はかなりものがあると考えている。府中、前橋などの家具産地が衰退する中で、競争をし、家具産地大川は生き残ってきたのだ。「昨年、提灯が特産の八女の業者から、提灯の製造の依頼がありました。当社、そして、NC業者、塗装業者と分業で作りました。八女の業者

にも負けないくらいのレベルの物ができあがったと思っていますよ。」(写真)大川の技術力は強みだ。木製品なら何でもできる。

今後の夢は何だろうか。「木工の町大川が、力強く生きていくこと。そして変化に機敏に対応していくことです。ね。今、国産材を使う事業に、国、県からの助成がつくようになっていきます。国産材、この新しい方向で会社としても、それに対応する材の供給に努力したいと思っています。また、新しい販売ルートの開発です。大川市長と共に、昨年から今年にかけて数回、言わばトップセールスに回りました。大学病院、百貨店、などです。これからもできる分野があれば、大川の活性化のために力を尽くしたいと思っています。」

第二十七期会頭として、また会社経営の面でもご活躍を期待しています。



▲(株)近藤材木店、NC業者、塗装業者と分業で作った提灯